

『マクティーク』における痛みの政治学：麻酔とマゾヒズムの表象

高野，泰志

九州大学大学院人文科学研究院文学部門：准教授：アメリカ文学（アーネスト・ヘミングウェイ）

<https://doi.org/10.15017/10307>

出版情報：文學研究. 105, pp.21-38, 2008-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：



『マクティীগ』における痛みの政治学

——麻酔とマゾヒズムの表象

高 野 泰 志

フランク・ノリス(Frank Norris)の『マクティীগ』(*McTeague: A Story of San Francisco*, 1899)は、アメリカ自然主義文学を代表する作品のひとつとして高く評価されている。物語は実在の事件に着想を得たもので、ノリスがハーヴァード大学の創作コースに在学していたときから書き続けていた題材である。主人公のマクティীগ(McTeague)は鈍重なおとなしい大男で、サンフランシスコで歯科医業を営んでいる。そこへ同じアパートに住む友人マーカス・スクーラー(Marcus Schouler)がいとこで恋人のトリナ・シエペ(Trina Sieppe)を連れてくる。トリナの治療を通じて次第に彼女に惹かれていくマクティীগは、マーカスに譲歩してもらい、ついにトリナと結婚することに成功する。しかし、まだマーカスとつきあっていたときに買っていた富くじが当たったためにトリナは5000ドルという大金を手に入れ、そのことがきっかけとなってマクティীগとマーカスの仲は次第に険悪なものになっていく。マーカスがその賞金の一部を手に入れる権利を主張し始めたのである。分け前をせしめることに失敗したマーカスは、マクティীগの歯科医業が実は無許可営業であることを告発し、マクティীগは歯科医を続けられなくなる。それ以後マクティীগ家はどんどん落ちぶれていき、常習的に飲酒を始めたマクティীগは病的なほど吝嗇になった妻に暴力を振るようになる。やがてついにトリナを殺害したマクティীগは逃亡を企てるが、逃亡先の砂漠で今は保安官になっているマーカスに追いつめられ、格闘の末にマーカスを殺害する。しかし死の間際にマーカスは自分とマクティীগを手錠で

つなぎ、砂漠の真ん中で動けなくなったマクティーフもまた、そのまま死ぬしかないことを暗示しながら物語は終わる。

『マクティーフ』に影響を与えた同時代の言説に関しては、これまでも多くの研究者たちが論じてきた。ジョゼフ・ル・コント(Joseph Le Conte)の進化論やエミール・ゾラ(Emile Zola)の自然主義文学論の影響に関しては最初期から注目されてきた。またチェザーレ・ロンブローゾ(Cesare Lombroso)の犯罪人類学の影響に関しては、ノリス研究の古典、ドナルド・パイザー(Donald Pizer)の *The Novels of Frank Norris* ですでに綿密に論じられている。本稿では麻酔(およびそれと同様の働きをするアルコール)とマゾヒズムというトピックを中心に取り上げるが、アルコールに関してはウィリアム・B・ディリングガム(William B. Dillingham)の *Frank Norris: Instinct and Art* に詳しい。またマゾヒズムに関してもウォルター・ベン・マイケルズ(Walter Benn Michaels)の論文で作品論としては不十分ながらも一応は取り上げられている。しかしこれらの研究はそれぞれ個別に追求されてきたのみであり、『マクティーフ』の主要なテーマである「痛み」の描写という視点からまとめて取り上げられたことはなかった。この作品は、歯の治療、夫が妻に振るう暴力、その暴力に対するマゾヒスティックな快感などの描写に見られるように、実は作品全編を通じて「痛み」の感覚を軸に展開しているのである。本稿は当時の医学的技術の発展と文化的・政治的状況に照らし合わせて作中の「痛み」の描写がどのような意味を帯びているのかを考察する。まず主人公マクティーフが歯の治療でトリナに麻酔をかける場面を見て、当時の麻酔の持つ文化的な意味づけを前提に、この場面が秘めている含意を分析する。続いて作品中に描かれるもうひとつの麻酔であるアルコールがマクティーフの獣性を目覚めさせる描写を見ることで、この作品ではアルコールはむしろ他者の痛みに対する「鎮痛剤」として機能していることを明らかにする。最後に結婚後のマクティーフの、痛みに対する捉え方の変化を見ていく。具体的にはマクティーフのサディズム、トリナのマゾヒズ

ムの直接的、間接的な原因を、当時の文化的・社会的な背景を元にして探っていく。

1. 麻酔の持つ意味

「ドクター・マクティーン 歯科医 麻酔あり」(7)。歯科医マクティーンの看板にはこのように記されている。後で触れるように、マクティーン自身は麻酔を非常に嫌っているのだが、それにもかかわらずこのように麻酔をかける設備のあることを看板に明示しているのは、ふたつの要因で当時のアメリカ社会が「麻酔」という技術とその恩恵を強く要求していたためである。まず第一に医学・文化的背景である。スティーヴン・カーン(Stephen Kern)によれば19世紀半ばに麻酔の技術が発明されて以来、西洋人は苦痛に対してそれ以前より遙かに鋭敏になったという。いったん「痛み」を取り除く可能性を知った後では、それまでのキリスト教的禁欲主義で痛みに耐える耐性を失ってしまったというのである¹。

第二に、当時の政治的要因が考えられる。世界規模の植民地主義的拡張政策に向かう一方で、移民による異人種混交の脅威にさらされ、当時のアメリカはなんとかしてアングロサクソン民族の優位性を主張する必要があった。そのためにさまざまな疑似科学的説明がなされていたが、「痛み」の捉え方もそのひとつであった。そういった人種的偏見に満ちた説明の中では、「理性的・精神的な文明人」である西洋人が痛みに敏感・繊細であるのに対して、「感覚的・身体的な未開民族」は通常痛みを感じることはあまりないと考えられていた²。いわば麻酔を必要とすることが、繊細な文明人であることの証拠として捉えられることになったのだ。西洋に伝統的な心身二元論的発想において、身体に加えられた痛みが精神に伝達されるのを妨害するのが麻酔の働きであるとするれば、麻酔とは身体が被った損傷から精神を保護するものと考えられる。身体ではなく精神をこそ守る必要のある「文明人」にとって、麻酔は文明の最も優れた到達点と考えられることになったのである。

オリバー・ウェンデル・ホームズ(Oliver Wendell Holmes)は、麻酔の発明者である歯科医ウィリアム・トーマス・グリーン・モートン(William Thomas Green Morton)に以下のような手紙を送っている。

その状態は「麻酔」と呼ばれるべきだと思う。この言葉は無感覚を、もっとはっきり言えば(中略)触れる対象に対する無感覚を意味している。(中略)

早いうちに呼び名がほしいのだ。そして(中略)一流の学者に相談して人類のあらゆる文明化された人種の口で繰り返されるような言葉に落ち着きたいものだ。(Warren 79, 強調は原典)

最後の部分を見ても分かるように、「麻酔」はその誕生当初から「文明」と関連づけられていたのであり、それが半世紀を経て非西洋を支配する「文明世界」の必需品として捉えられるようになるのである。したがって自らの痛みに関心した当時のアメリカ社会は、痛みの伴う歯の治療に麻酔を使うことを当然強く要求した。それはある意味で自らの文化的優位さの申し立てでもあった。

『マクティーン』は遺伝的に「野蛮」で「獣」のような性質を受け継いだ主人公マクティーンが、環境の影響によって先祖返的に非文明の状態へと退化していく姿を描いた作品であるが、テキスト冒頭で「[マクティーンは]まるで神経を持っていないかのようであった」(14)と描かれる。つまりマクティーンは痛みとは無縁の存在であったことが示唆されている。このような「文明」とは程遠いマクティーンが麻酔を嫌い、拒否していたように描かれるのは当然のことと言えるだろう。

しかしマクティーンはトリナに出会うことで、麻酔に対する見方を徐々に変えていく。

虫歯は深く、トリナは顔をしかめ、うめき声をあげ始めた。トリナを痛めつけることはマクティーンにとって紛れもない苦痛であった。それにもかかわらず、彼は治療の間じゅうずっとその苦痛に耐えなければならぬのだ。世界中でよりもよって彼女に責め苦を与えなければならぬなんて、まさしく苦悶であり、その苦悶の中でじっとりと汗がにじみ出た。これ以上最悪のことがあり得るのだろうか。

「痛い？」彼は心配そうに尋ねた。

彼女は眉をひそめ、短く息を吸い込み、指を閉じた唇に当ててうなずいた。マクティーンはタンニンのグリセリン溶剤を歯にスプレーしたが役には立たなかった。彼女を痛めつけるくらいなら麻酔を使わざるを得なかった。彼は麻酔をひどく嫌っていたのだが。亜酸化窒素ガスは危険であると考えていたので、この場合には、他の全ての場合にそうしたようにエーテルを用いた。(20-21, 強調は筆者)

強調の最後の部分を見れば分かるように、マクティーンはできることなら麻酔を使わずにすませたいと考えていた。しかし、トリナを傷つけることがマクティーンにとって「苦痛」(“anguish”)に感じられ、仕方なくマクティーンは麻酔をかけることにするのである。

この場面は本作品の前半部分のキーシークエンスになっている。ここで最も重要な事実、マクティーンの方が痛みに対して敏感な、すなわち文明化されたトリナの状態に合わせようとしていることである。後に結婚してからトリナは、服装や食事などでマクティーンに洗練した生活を送らせようとし、いわば「文明化」しようとするが(「それからふたりは少しずつではあるが妥協することを覚え始めた。全然気づかないうちにふたりは互いに生活様式を合わせていった。トリナが恐れていたようにマクティーンのレベルに下がるのではなく、トリナの方がマクティーンを自分のレベルに持ち上げることもできるのだということが分かってきた。」[106-107]), マクティーン

の「文明化」はすでにこの時に始まっているのである。

そしてマクティーフが「野蛮」な状態から「文明」への一步を踏み出したのは、トリナの痛みを自分の痛みとして感じたからなのだ。もっとも麻酔をかけられて意識を失ってしまったトリナを見て欲情したマクティーフは、すぐに「非文明」の状態に逆戻りし、意識のないトリナに襲いかかろうとする点を考えても、もちろんマクティーフの「文明化」はここで完成されたわけではない。しかしマクティーフの「文明化」がそもそも他者の痛みに共感することによって起こっていることに我々は注目すべきである。

マクティーフは結婚後、いったんはトリナの感化で文明人としての生活を営むようになるが、歯科医を続けられなくなって生活が困窮するようになると、再びもとの野蛮な状態に戻ってしまう。次第にトリナに対してサディスティックな暴力をふるうようになっていくが、マクティーフの野蛮への回帰を誘発することになるアルコールはどのように描かれているだろうか。

アルコールがマクティーフに及ぼす影響は奇妙なものであった。アルコールを飲んでも彼は酔っぱらわなかった。残忍になったのだ。酩酊するどころか、4杯目あたりから生き生きとしだし、抜け目なく機敏で饒舌にすらなった。それからある種の邪悪さが彼のうちに頭をもたげた。彼は強情で意地悪になった。そして普段よりほんの少しだけ飲み過ぎると彼はトリナに嫌がらせをし、怒らせ、時には虐待したり痛めつけたりすることにある種の喜びを見出すようになった。(168-69)

ここで問題にしたいのは、なぜアルコールがサディズムの衝動を引き起こす直接的なきっかけとして用いられているのかという点である。まず、ひとつには当時の文化的背景に「酔いどれアイリッシュ」というステレオタイプがあったことが挙げられる。マクティーフはその名前からおそらくアイルランド移民であることが窺える。ちなみに登場人物のほとんどがファーストネー

ムで名を呼ばれているのに対して、マクティーフはファーストネームを持つてすらいない。これは人種を表すファミリーネームをインデックスとして常に表示し続けたかったからかも知れない。アイルランドからの移民は1840年代後半の大飢饉の影響もあって、トリナの家族らドイツからの移民とともに19世紀後半の移民の最も多くの割合を占めていた。そしてマクティーフの父親は常習的に大量飲酒していたことが描かれている。森岡裕一が論じているように³、アイルランド移民——飲酒——暴力というのはしばしば結びつけて考えられることになったのである。つまりアルコールは当時、移民に対する差別的な表象を担っていたのである。

ノリス自身の人種観も、当時のアメリカのアングロサクソン至上主義者に典型的に見られるものである⁴。そしてそれはマクティーフ以外の登場人物たちもその大半が非アングロサクソンの人種として描かれ、ほとんどの人物が悲劇的な結末を迎えることから明らかである。ドイツ移民のトリナ⁵はマクティーフに殺害され、トリナの家族は事業がうまくいかなかったために、まるで追いやられるようにして当時はまだ未開の地であったニュージーランドへ再び移住することになる。同じくドイツ移民のマーカスは決闘の末マクティーフに殺され、メキシコ人のマリア・マカパ(Maria Macapa)とポーランド系ユダヤ人のザーコフ(Zerkow)の夫婦はマクティーフ夫妻の悲劇を再演し、夫は妻を殺害した後で自殺する。この作品に出てくる大半の人物は、一時的に文明化されることはあっても、本質的に野蛮な、未開の存在として描かれているのである。

この作品ではオールド・グラニス(Old Grannis)とミス・ベイカー(Miss Baker)のエピソードだけが唯一ハッピーエンドを迎えるように描かれている。これまで批評家たちはこのふたりだけが他の登場人物のように不幸な結末で終わっていない理由に関して非常に頭を悩ませてきた⁶。しかし以上のようなことをふまえると、作品に登場するさまざまな人種の中で、アングロサクソンである彼らだけがハッピーエンドを迎えることはそれほど不思議で

はないはずである。作品中で最も繊細で敏感な（つまり文明的な）このふたりだけが、痛みを免れることを許されるのだ。

またアルコールが描かれるもうひとつの理由は、それがアメリカ大陸で担ってきた歴史に由来する。アメリカではヨーロッパ人の入植最初期から、酒は貴重な薬品として使われてきた。まだ麻酔の発明される前はアルコール度数の高い酒を用いて痛みを和らげてきたのである。したがって英語で“painkiller”というと、通常は鎮痛剤のことであるが、口語では酒、特にウィスキーを意味する。この節の最初の引用に明らかなように、マクティーフにとってアルコールは自らの感覚を麻痺させるものとして働いたというよりはむしろ、他者の痛みに対する共感力を麻痺させていたようである（「虐待したり傷つけたりすることにある種の喜びを見出すようになった」）。かつてマクティーフはトリナの痛みを自分のものごとく感じ、一度は文明化され始めた。ここで彼は酒を飲むことでトリナの痛みに対していっさい無感覚になってしまう。つまり物語後半でのアルコール＝“painkiller”は、前半における麻酔の持つ意味と対をなしているのである。この作品で描かれたアルコールの持つ役割は、自らの痛みに対してではなく、いわば他者の痛みに対する鎮痛剤、麻酔であったのだ。

ノリスはハーヴァード課題作文の時点ですでにマクティーフの殺人のきっかけをアルコールと想定していたが、そのことから明らかなように飲酒に対しては非常に批判的であった。それはノリス個人のアルコール観というにとどまらず、広くアメリカ社会で受け入れられてきた考え方と言えるだろう。酒に対して寛容なカトリック教徒であるアイルランド人と飲酒を結びつけた批判的ステレオタイプが生み出されたことから分かるように、アメリカではピューリタニズムの伝統から酒を社会悪と考える傾向が強い。

当時のアメリカ社会で麻酔が文明の到達した最も輝かしい業績であると考えられる一方で、同じように鎮痛剤の役割を果たす酒が害悪と考えられていたことは、非常に深い意味を持っている。文明の象徴としての麻酔の恩恵か

らは、あらかじめ「非文明的」な他民族は除外されており、また社会的害悪と考えられていたアルコールは常に移民と結びつけて考えられていたのである。ノリスがこの作品で描こうとしたのは「500世代にもわたる」遺伝的な悪徳が先祖返りのようにして現代のサンフランシスコに蘇った姿であり、マクティーンはその悪徳を飲酒によって目覚めさせた野蛮人として描かれる。語り手は「種族全体の邪悪が彼の血管を流れていた」（22）と述べるが、しかしその「種族」とはあらかじめ「非文明的」と見なされていた非アングロサクソンの移民でしかありえなかったのである。いわば500世代も以前の祖先の犯した悪徳はすべて移民に背負わされ、そうすることでノリスは自分たちアングロサクソンを安全な位置に確保していることになるのである。

2. マゾヒズムの発明

『マクティーン』はノリスがハーヴァード大学在学中に書いた課題作文を発展させたものである。ジェームズ・D・ハート(James D. Hart)編集によるノリスの課題作文集によれば、マクティーンのトリナ（この段階ではベシー [Bessie]と呼ばれていた）に対する暴力は当初以下のように描かれていた。

幼稚園の他の教師たちはよく目にしていたのだが、ベシーの指先はふくれあがり、爪は紫色に変色していて、まるでドアに挟まれたように見えた。実際ベシーはそうだと説明していたのだが。しかしそれは嘘だった。彼女の夫マクティーンはウィスキーを飲んで帰宅したときにはよく彼女の指先に噛みつき、その力強く大きな歯で噛みしめていたのだ。そういったときにはいつだって、狡猾にもどの指が一番痛いかよく覚えているのだ。彼女が抵抗しようものなら巨大な骨張った拳で眉間を殴りつけて叩きつぶすのだ。

こんな風に残酷さを発揮することで、彼はしばしば好色な情欲を燃え

たぎらせ、彼女を投げ飛ばし、拳から血を流しながら正気を失い、ベッドにまたがると、その後は忌まわしく、獣じみていて言葉にもできないようになってしまったのだ。(78)

興味深いのは、課題作文の時点では夫婦間の暴力において性的快楽を抱いているのは夫の方なのだが、完成した作品では妻もまた、その暴力に対して倒錯的な快楽を覚えているという点である。以下の引用が完成版での問題の場面である。

近所の人たちや食料品店の店員などは、まるでドアに挟まれたかのよりにトリナの指先が膨れ上がり、爪が紫色になっているのによく気がついた。実際彼女はそんな風な説明をしていたわけなのだが。実のところはマクティークが酒を飲み過ぎたときに彼女の指先のいちばん痛いところに噛みつき、かじったり噛み潰したりしていたのだ。時にはこのやり方で彼女からお金を奪い取ってもいたが、たいていは己の満足のためにそうしていただけなのだ。

そして何らかの奇妙で説明のつかない理由で、この残忍さがトリナの愛情をますます掻き立てたのだ。彼女の中に病的で不健康な、服従することへの愛情を呼び覚まし、屈服することへの、そして男性的な抗いがたい力が命ずるままに己を委ねることへの、奇妙で不自然な喜びを引き出したのだ。(171)

ハーヴァード課題作文の段階では、たんに夫がサディスティックな性癖を持っていたことしか描かれていなかったのに対して、完成作品の方ではそのサディスティックな虐待に対して、妻の側が喜びを見いだしていることまで描かれるようになったのである。この変更はいったい何を意味しているのだろうか。

この疑問に答えるためには、当時サディズムやマゾヒズムが文化的にどのような受け止められていたかを見ていく必要がある。フロイトに先立つ性に関する精神分析の研究書、リヒャルト・フォン・クラフト＝エービング (Richard von Krafft-Ebing) の『性的精神病質』(*Psychopathia Sexualis*) が出版されたのは1890年、その英語訳が出版されたのが1892年のことであり、出版と同時にたちまちベストセラーとなった。この本は初めてマゾヒズムという概念を提唱し、その存在を世間に知らしめたものとして有名である。以下に述べるように、この作品におけるマゾヒズムの描写が『性的精神病質』の記述に酷似していることから、時期的に考えてもノリスがこの本を読んでいたことは間違いないだろう。ハーヴァード課題作文の時にはなかった、夫の暴力に倒錯的な快感を抱く女性というモチーフを取り入れたのは、このクラフト＝エービングのベストセラーを読んだから、あるいは利用することを思いついたからではないだろうか⁷。

クラフト＝エービングはマゾヒズムを次のように説明している。「女性的なマゾヒズムという意味での、この服従の本能が病的に増加する症例は、もしかすると頻繁に見られるものかもしれないが、慣習がその顕現を抑圧しているのである。多くの若い女性たちは夫や恋人の前にひざまずくことが何よりも好きなものである」(131)。「サディズムがその精神的な特質において、男性的な性的特徴が病的に強まったものであると見なしうるのに対し、マゾヒズムはむしろ紛れもなく女性の精神的特質が病的に墮落したものを意味している」(133)。クラフト＝エービングによれば、女性が男性に服従したいという衝動は「本能」であり、それがあまり表面に現れないとすれば、それは単に社会的な慣習によって抑えつけられているからにすぎないという。また、サディズムが「男らしさ」の強化であるのに対し、マゾヒズムは女性的特質の「墮落」であると考えられている。クラフト＝エービングはマゾヒズムを「精神病質」と捉えながらも、その根本的原因を女性性の本質に求めているのである。

サディズムに関しても同様である。クラフト＝エービングによるサディズムの解説は以下のようなものである。

しかしながらそのような奇怪な、サディスティックな行動は、男性にあっては女性より遙かに頻繁に見られるものであるが、女性とは異なった生理的な状態に原因があるのである。両性の交わりにおいて、積極的かつ攻撃的役割は男性のものであり、女性は消極的かつ受け身のままでいるものである。女性を勝ち取り、征服することは男性にとって大きな喜びであり、それゆえ求愛の技術において自分の身を明け渡す寸前まで自らを守り続ける女性が憤み深くあることは大きな精神的意義と重要性を持っているのである。通常状況では男性は障害にぶつかるものであり、その障害を克服することこそが男性の役割なのである。そしてそのような障害があるために、自然が男性に攻撃的な性格を与えたのである。しかしこの攻撃的な性格が病的な状況下では異常に発展するかもしれない、その欲望の対象を徹底的に屈服させ、あるいは破壊し、殺害しようとする衝動となって現れるかもしれないのだ。(56)

ここでクラフト＝エービングはサディズムの原因を突き止めようとし、男は性的関係において、常に活動的、攻撃的な役割を果たし、女性は受動的で防御的な役割を果たすものだ、と指摘する。したがって男性は女性を勝ち取り、征服し、服従させることに喜びを見いだす生き物である、と述べているのである。そして最も重要な点は、女性の抵抗に打ち勝つために、「自然が男性に攻撃的な性格を与えた」と主張している点である。つまりサディズムにせよマゾヒズムにせよ、クラフト＝エービングはその原因を男性性・女性性の本質に求め、男性の攻撃性を「自然の与えたもの」として正当化していると言える⁸。

ジョン・K・ノイズ(John K. Noyes)もマゾヒズムの研究書で述べてい

るように⁹、マゾヒズム的实践は歴史的にもっと古くからあったにもかかわらず、マゾヒズムという言葉と概念はちょうどこの時期に「発明」される必要があったのである。その要因の全てを本論考で扱う余裕はないが、原因のひとつとして考えられるのが家父長制イデオロギー崩壊の危機である。初期のフェミニズムの勃興などによって、ヴィクトリア朝的な男性の特権が次第に疑問視され、家庭に捕らわれた女性の解放が徐々に叫ばれるようになってきたこの時期、女性は男性に服従するものであり、男性が支配することが「自然」なのだとする疑似科学的主張が数多く現れた。このような時期にクラフト＝エービングは男性の本質を攻撃性、女性の本質を男性への服従であるとするマゾヒズム論を提起し、男性による女性の支配を正当化しようとしたのである（したがって『性的精神病質』で「異常」とされるのはもちろん男性に現れるマゾヒズムである）。

一方マクティーフによるトリナの「征服」は、物語の前半の主要部分を占めているが、このクラフト＝エービングの本質主義的男性観・女性観に忠実に従っているように見える。

突然彼はその巨大な両の腕で彼女を捕らえ、計り知れない力で彼女の抗うのを押しつぶし、口にべったりとキスをした。それからマクティーフに対する大いなる愛情が突然トリナの胸のうちに燃え上がったのだ。彼女はかつてそうしたように、彼に身をゆだね、だしぬけに征服され、屈服させられたいという奇妙な欲望に身を投げ出したのだ。(103)

最初は抵抗していたトリナが、力をもってねじ伏せられると今度は逆にその力に服従することを望むようになってくる。だからこそ、彼女がマクティーフに対して愛情を抱くのは彼に屈服した後なのである。また、当然女性を勝ち取ることに喜びを見いだす男性は、いったん女性が征服されてしまうと、その喜びの大きな部分が失われてしまうことになる。

従順で素直な、手に入れることのできるトリナは、以前そのままに、つまりあの近寄りがたいトリナと同じくらい魅力的で愛らしいだろうか。あるいは彼[マクティーフ]はぼんやりと気づいていたのかもしれない。きっとそうなのだ、変わらぬ世の常に違いない。——男というものは女が与えようとしないものがあるからこそ、女を望むのだし、女というものは自分が男に明け渡したのものがあるからこそ男を崇拜するものなのだ。ひとつ、またひとつと譲り渡されるごとに、男の欲望は冷えていく。ひとつ、またひとつと明け渡すごとに、女の崇拜はいや増していくのである。しかしどうしてそうでなければならぬのか。(51)

クラフト＝エービングの描いた図式通り、トリナは「服従する本能」を持っていたために、屈服したことによって、ますますマクティーフに愛情を寄せることになるのである。それに対して「征服すること」に喜びを見いだすマクティーフは、トリナが一度屈服してしまうと、トリナに対する興味の大半を失ってしまう。

多くの伝記作家が指摘しているように、ノリス自身、実生活では相当家父長的イデオロギーに染められていたようである¹⁰。そのような人物にとって、崩壊しつつあるヴィクトリア朝的男性中心主義とフェミニズムによる女性解放運動は、意識的にせよ無意識的にせよ、脅威として捉えられていたはずである。こういった点を考慮に入れると、ハーヴァード課題作文の時にはなかったトリナのマゾヒズムという要素がなぜ組み入れられることになったのか、という問いの答えは明白であるように思われる。つまり、おそらくはマゾヒズムという概念を「発明」したクラフト＝エービング自身がそうであったように、トリナのマゾヒズムは男性の家父長的支配の正当化として働いているのである。

3. 結論

以上で見てきたように、『マクティーン』の中心的な主題が「痛み」を描くことにあると考えると、物語がふたつの軸を中心に展開しているのがわかる。ひとつは主人公マクティーンが「文明化」と「先祖返り」である。痛みを感じない野蛮人から「他者の痛みへの共感」を通していったんは文明化されるが、アルコールを引き金として再び他者の痛みに対して鈍感な野蛮人へと回帰していく。もうひとつの軸はマクティーンとトリナのサドマゾヒズムである。彼らの生活が貧困になり、かつての祖先の頃の自然へと回帰していくに従って、「女は服従し、男は征服する」という「普遍の真理」をますます極端なかたちで再演し始める。

しかし、このふたつの軸を重ね合わせて見たとき、おそらくはノリスの意図していなかった大きな矛盾が立ち現れてくる。マクティーンとトリナに見られる征服と服従の欲求は、「変わらぬ世の常」(51) という表現がされていることから分かるように、男女間の普遍的心理として描かれている。そうであればこそ、男性による女性支配の構図を正当化する根拠になったはずなのである。しかしその「変わらぬ世の常」はアメリカ社会の中で増加しつつあるとはいえマイノリティである異民族の中で再演されているのである。ノリスはマクティーンらの「野蛮さ」を慎重に異民族の中に囲い込み、自分たちアングロサクソンを安全圏に確保しようとした。しかし男性による女性の支配という「不変の真理」もまた、その同じ構図の中に囲い込まれ、マクティーンが体現する冷酷で残忍な性質と並置されてしまう。つまりノリスの正当化しようとした家父長制もまた、サドマゾヒスティックな倒錯と同じく、500代前から脈々と受け継がれてきた「野蛮」の特徴に回収されてしまうことになる。

『マクティーン』における麻酔（アルコール）とマゾヒズムの表象は、それぞれ同時代の文化的・政治的言説に回収され、人種的・性的支配構造を支える働きをしていることは間違いない。しかしそれと同時にこのふたつの要

素は互いに矛盾しあい、同時に併置されたとき、そのまま支配的言説に回収されるのを拒んでいるのである。

註

- 1 Kern 78.
- 2 “The prevailing Enlightenment thinkers on primitivism celebrated the pain-free state of the natural savage, who supposedly did not suffer the debilitating illnesses and nervous disorders of the ‘hypersensitive’ European races. Thus the widely published observations of sophisticated travelers and amateur anthropologists lent credence to the white man’s belief that his own pain was somehow special. ‘In our process of being civilized,’ wrote S. Weir Mitchell, the famous nineteenth-century American neurologist, ‘we have won, I suspect, intensified capacity to suffer. The savage does not feel pain as we do’” (Morris 39).
- 3 [[アイルランド人移民は]一九世紀後半に顕著な反カトリック、反移民という、社会的ダーウィニズム、土着主義の犠牲になった感が強い。(中略)一八六七年の聖パトリックの日に、酔っぱらったアイリッシュが警官や市民に狼藉をはたらく場面を描いた絵 [には] 彼らが類人猿、すなわち人間以下の野獣として描かれている] (森岡 18)。
- 4 例えば“The Frontier Gone at Last”というエッセイは、アメリカの帝国主義的拡張政策を擁護したものであるが、ここで彼はアングロサクソン民族の優秀性を歌い上げている。
- 5 作品前半ではマクティーンを文明化する存在として描かれており、一見矛盾するように思えるかもしれないが、当時ドイツからのゲルマン系移民は非アングロサクソンの直接的祖先として比較的文明に近いとされていた。“... among [the white races] the highest, it was widely agreed, was the Indo-European stock from which the Germanic peoples emerged. In England and North America, there was a further narrowing of focus: the Anglo-Saxons were the favored offshoot of the Germanic stock” (Appiah 280).
- 6 例えばCampbellを参照。
- 7 『マクティーン』の出版は1899年、ハーヴァード課題作文の上記引用箇所は1895年に書かれている。ハーヴァード課題作文の時にはまだ『性的精神病質』を読んでいなかったか、利用することを思いつかなかったのかもしれない。あるいは課題作文という短い文章の中にはあまり複雑な要素を盛り込むことができなかつたためとも考えられる。

- 8 クラフト=エービングは当時の支配的言説であったソーシャル・ダーウィニズムの影響を強く受けており、その当然の帰結としてあらゆる病質は遺伝的決定性に基づいて本質主義的に求められるようになる。
- 9 「苦痛のエロスの表現は、クラフト=エービングやザッヘル=マゾッホのはるか以前から存在していた。しかしながら、この二人の時代に登場したコード化のために、これらの行為は、まったくそれまでとは違った形で問題視されるようになった。これらの行為がこのように変化したのは、他のことは無関係な科学的発明のせいではなかった。それは、人間存在の本質、そして、人間の生物学的素質、セクシュアリティ、社会組織についての考え方が変化したことと密接に関連していたのである」(ノイズ 21)。
- 10 “In his private life, Norris apparently insisted upon all the prerogatives of the Victorian male He appears to have felt — like many earlier nineteenth-century tractarians — that the woman’s place was definitely in the home and her role was to exercise a tranquilizing and ennobling influence upon her husband” (French 87).

Works Cited

- Appiah, Kwame Anthony. “Race.” *Critical Terms for Literary Study*. 2nd ed. Ed. Frank Lentricchia and Thomas McLaughlin. Chicago: U of Chicago P, 1995. 274–87.
- Campbell, Donna M. “Frank Norris’ ‘Drama in a Broken Teacup’: The Old Grannis—Miss Baker Plot in *McTeague*.” *American Literary Realism* 21 (Fall 1993): 40–49.
- Dillingham, William B. *Frank Norris: Instinct and Art*. Lincoln: U of Nebraska P, 1969.
- French, Warren G. *Frank Norris*. NY: Twayne, 1962.
- Hart, James D. ed. *A Novelist in the Making: A Collection of Student Themes, and the Novels “Blix” and “Vandover and the Brute,” by Frank Norris*. Cambridge: Harvard UP, 1970.
- Kern, Stephen. *Anatomy and Destiny: A Cultural History of the Human Body*. Indianapolis: Bobbs, 1975.
- Krafft-Ebing, Richard von. *Psychopathia Sexualis*. Trans. Franklin S. Klaf. NY: Arcade, 1998.
- Michaels, Walter Benn. “Masochism, Money and *McTeague*.” *Threepenny Review* 16 (1984): 7–8.
- Morris, David B. *The Culture of Pain*. Berkeley: U of California P, 1991.
- Norris, Frank. *McTeague*. 2nd ed. NY: Norton, 1997.

——. “The Frontier Gone at Last.” *Frank Norris: Novels and Essays*.

Ed. Donald Pizer. NY: Library of America, 1986. 1183–90.

Pizer, Donald. *The Novels of Frank Norris*. NY: Haskell, 1973.

Warren, Edward. *Some Account of the Letheon; or Who Was the Discoverer?*
2nd ed. Boston: Dutton, 1847.

ジョン・K・ノイズ『マゾヒズムの発明』岸田秀, 加藤健司訳, 青土社, 2002年。

森岡裕一「酔いどれアメリカ文学序説」『酔いどれアメリカ文学——アルコール文学文化論——』英宝社, 1999年。5–83頁。